

中国語教育と教材開発の課題

Some difficulties in Chinese Language education and
the development of teaching materials

町田 茂*
MACHIDA Shigeru

要約：外国語科目としての中国語教育は教育法においてまだまだ成熟しているとは言えず、そもそも何を教授するのかという根本問題をはじめ、教育内容に関し様々な課題を抱えている。しかし近年の中国語学習者の増加に伴い、中国語担当者はとかく授業を開講することにエネルギーを費やし、教育内容や教材のあり方についての問題提起はさほど多いとは言えない。研究会等でも特定の項目についてどうするかといった各論は論じられるが、教材全体のあり方についてはあまり議論の対象になっていない。本稿は大学の共通外国語科目としての中国語教育や中国語教材の抱える問題点を率直に指摘し、筆者の現段階での努力目標を提示する。中国語だけでなく、より多くの学科の担当者との建設的議論の叩き台としたい。

キーワード：外国語教育法 初級中国語 中級中国語

1. はじめに

大学の外国語科目としての中国語教育の歴史は決して短くない。しかし中国で対外開放政策が始まった1980年代以降、特に1990年代以降中国語選択者が急速に増加し、それに伴って学習者の増加に教育内容の整備が追いつかないという現象が生じている。こうした問題は本来中国語教育界で論じられるべきであるし、昨年中国語教育学会が設立されたことも特筆に価する。しかし一方、外国語教育の一環として中国語教育が行われる以上、中国語教育が未成熟のゆえに抱える問題点を率直に認め、他教科の担当者に指導を仰ぐこともまた必要であると考え。本稿はこうした観点からあえて中国語の専門知識を必要とする話題を極力避け、他教科の担当者との交流のきっかけになるような問題提起を目的としている。本稿が大学における中国語教育改善の叩き台となることができれば幸甚である。

2. 中国語教育の抱える問題

現在中国語教育が抱える問題を端的に示しているのが、毎年洪水のように出版される教科書であろう。種類が豊富で装丁も美しく、外見ではどれも立派である。しかし、それらがどのようなカリキュラムを前提に、どのような教授法を目論んだものか考えると、戸惑いを感じざるを得ない。「初級」と名のついたものでも、そのレベルの差はきわめて大きく、語彙数、文法項目数、練習問題の難易度の差など、言い出したらきりがない。

もちろん、大学のカリキュラムの多様化に伴い各大学での教育事情に大きな差異が生じたため、それに応じて多様な教科書が出版されることは好ましいことである。しかし、こ

*国際文化講座

の「多様化」という一見きわめて正当な主張の影に、中国語教育の抱える構造的、根本的問題が潜んでいることも事実であろう。思いつく範囲でも次のような点を指摘することができる。

- (1) 学習範囲における不統一
- (2) 規則重視か場面重視かという教授法における不統一
- (3) 学習順序における不統一
- (4) 学習深度における不統一
- (5) 大学外の中国語能力検定試験の影響

大学のカリキュラムの多様化に伴い初級クラスの学習範囲に差異が生じることは当然の成り行きといえる。しかし、中国語教師や学習者の間でそもそも初級中国語とは何かという根本部分の共通理解が成立する以前にカリキュラムの多様化を迎えた、または、かつて中国語クラスが少人数の集まりであった時代には一応成立していた初級概念が、多様化した多数の学習者を前に立ち行かなくなったというのが現状であろう。従って、中国語教師の間でも、「初級」概念の理解は大きく異なっており、「初級」と言って話をしているうち、だんだん話が通じなくなるということは日常茶飯事である。初級概念が不明確である以上、中級の概念規定もきわめて曖昧で、初級と中級の差異についても個人による理解の差が大きい。そのため、初級において何を学ばなければならないのか、何は学ばなくてもよいのかという出発点において、すでに教師間での調整が必要となる。一部の大学では統一教科書制度を導入している^{注1)}が、これは各クラスの格差を解消する最も簡便な方法であるものの、一方でどこまで教師間の意思疎通が図られているのか疑問が残る。

中国語教育においてこのような悩みが生じる背景には、現代中国語という学習対象そのものの概念規定の曖昧さと、中国語教師がそれとどう向き合うかという根本問題が横たわっている。現代中国語の概念については、中華人民共和国（大陸）において明文化されたものが存在するが、これはどちらかと言えば文章語における規範をおおまかに示したもので、口語表現になればなるほど地域差や、話者による個人差の壁に衝突する。中国人の中国語教師同士でさえ、この言い方は正しい、誤り、という論争がしばしば発生するほどである。外国語教育としての「中国語」の学習対象として、文章語をイメージするのか、口語をイメージするのかという出発点における教師間や教師と学習者の意識の食い違いは、中国語自身の持つ多様性に直面することになる。さらに、大陸の中国語とは若干趣きを異にする台湾の中国語（「国語」）をどう位置付けるのかという問題もどこかでくすぶり続けている。加えて、日中国交正常化以降日本の中国語学習者が大陸の日常の口語に容易に接触できるようになってからまだ日が浅いことも、現在の中国語教師や学習者のそもそも中国語とは何かという理解の不統一に少なからぬ影響を与えていると考えられる。^{注2)}

仮にこうした入り口の問題に一定の共通認識が形成されても、次の、初級中国語、中級中国語の範囲の認識における不一致は解決しない。1970年代から1980年代はじめ、とりもなおさず、日本の大学で中国語がごく一部の学生を対象とした言語から一般教育外国語科目として多数の学生を対象とするようになっていった時代の初級教科書を紐解くと、その内容の豊富さに驚かされる。教科書には明記されていないものの、教材編集の根底には、口語文法を文章を読み解くための基礎と位置付け、そのために、初級において、発音と口語の文法規則を一通り終らせるという発想が感じられる。そして、初級である限り、それ

は一年次で学習すべきと考えた教師も少なからずいたと思われる。

その後の大学カリキュラムの多様化に伴う外国語科目の扱いの変化、履修者の増加は、こうした初級の理解を揺り動かし始めた。大学・学部による学生の学習進度の差異が顕著になったことに伴い、初級教科書が収録する語彙数、文法項目数にも大きな差が生じてきた。さらに教える側でも、履修者数の増加に合わせて教師数を補充する必要性が生じ、とにかく必要な授業を開講しなければならないという責務の達成に精力を奪われ、初級の学習範囲の共通理解という根本問題が教師間で十分検討されて来なかったことは事実であろう。その結果、複雑で理解に時間を要するいわゆる「補語」などは、初級の授業では簡単に扱うにとどめ、中級の授業になると今度は初級で学習済みとして個別の問題しか扱わないという現象も見られる。市販の教科書がこのような編集になっていることが多く、単純に教師の責任として片付けられない。往々にして教科書編集者に中国語をどのようにして学習したらよいかという全体を見直すビジョンが欠けていることをまず指摘しなければならない。これに加えて、日本国内において多くの中国人教師が登場したことも日本人教師の課題を倍加させた。大陸でも、台湾でも、近年外国語として中国語を教授することを重要な事業とみなし、教授法の研究が進み教師の資格制度が制定されてきたことは大きな進歩と言える。そして、中国人教師の協力を得ることで、日本の教材から、かつて見られたような日本人による人造の中国語が消えつつあることも喜ばしい。しかし、近年提出されている中国における初級中国語指導要領^{註3)}は中国に留学し毎日中国語を学ぶ学生を対象にしたものであり、日本の大学の週1～2時間だけ学習するような外国語科目にそのまま流用することはできない。中国人教師を受け入れることにより、日本の大学として、どのような学習目標を持つのかを中国人教師に提示せざるを得ないという状況が生じてきた。

中国語教育が抱える課題はこれだけではない。近年日本の外国語教育に対し、文法や読みが中心で、実践的会話力が弱いという批判がよく聞かれる。こうした批判を受け、生粋の中国語日常表現を集めたことを看板に掲げた初級教科書が出版され初めた。こうした教材は、どのような場面でどのような言い方をするかという言語の使用面を重視して編集されており、練習問題も模範例文の反復や言い換え練習に重点が置かれている。この種の教材の登場は初級の概念規定に対し新たな課題を突きつけることになった。いわゆる生粋の日常表現は、往々にして文法的に複雑で中国語を母語としない学習者には理解が難しい。あくまでも中国語を母語としない立場でより基本的なものから学習しようとするなら、初級の段階での場面重視は早すぎると言わなければならない。しかし、文法規則中心の学習が特効薬でないことも事実であり、特に、発音、聞き取りといった音声面は、時間をかけた丁寧な指導が必要である。いずれにしても、学習順序の問題において、教材間の、また、教師間の格差が拡大していることは事実である。現在出版されている初級教材において学習項目の順序がばらばらであることには、学習範囲の問題と同様注意しておかなければならない。

学習範囲、学習順序の問題の影に隠れているものの両者同様重要なのが、学習深度の問題である。他の言語同様、中国語でも、基礎語彙の用法が複雑である。特に形態変化を持たない中国語では、同じ品詞に分類される語でも一つ一つで用法が異なることが多く、こうした点へのきめ細かな理解が必要になる。また、文型によっては応用範囲の広いものがあり、一体これらを初級・中級にどのように配分し、それぞれでどの程度まで教授するの

かという課題が有る。現在出版されている教科書を見ると、同じ文法項目でも、2, 3の用例を並べただけのものから詳細な説明を加えたものまで多種多様である。また、語彙の用法を重視した教科書と文型を重視した教科書という差も顕著である。

最後に近年の中国語教育に加わった課題が、中国語能力検定への対応である。現在日本では様々な能力検定試験が用意されており、中国が実施するHSKも日本での受験が可能である。これらの中には通常初級教科書では学習しない慣用語や新語、高級な文章語への理解を求めるものが有り、口語、文章語の両刀使いであることが要求される。卒業までに検定試験で一定の成績を修めたいという学生の要望に対しどう対応するのか、難しい課題である。

3. 教材開発の試み

日本で作られる中国語教材は前節で述べた様々な問題に直面しているため、新刊書が出版されてもロングセラーにはならず、翌年以降はすぐに忘れ去られてしまう傾向がある。中国で外国人を対象とした中国語教育に従事している中国人教師と日本の中国語教育界との交流が深まるとともに、中国人教師の側から日本のこうした現状に対し率直な批判が出されるようになった。劉方2002は日本の教科書の中国語発音表記の不備を指摘し^{注4)}、史有為1997は、「日本で出版された教材のかなりのものがない加減で、文法の説明や練習が不足していたり全くなく、目標が定まらず実践的でなく、科学的でもない」と批判している。^{注5)} 中国語教育に関わる者として、こうした批判は謙虚に受け止めなければならないと考えている。ここでもう一度現在の教材の抱える問題を直視し、今後の教材に必要な条件を考えると、まず、以下のようなものが挙げられる。

1. 学習項目が明確で、項目の配列が論理的に適切である。
2. 文法規則の体系的学習を目指すのか、場面ごとの表現の仕方の習得を目指すのかという二つの流れの中での位置づけが明確である。
3. 複雑で習得に時間のかかる項目については、反復学習を通して徐々に学習を深められるように工夫されている。
4. 日本語を母語とする学習者にとって必要な情報が含まれ、特に、日本語を母語とする学習者の弱点を補うような構成になっている。

上述の初級、中級の学習範囲の問題には早急な結論は出せない。むしろ、当面の教材開発にとって、初級、中級の学習範囲を一方向的に決めることは有害だと言っても過言ではないだろう。最も重要なのは初学者が段階を踏んで学習するのに適切な学習順序とそれを反映した指導要領を開発することである。そのどの段階までを初級と呼ぶかは、極論すれば、各学校で現場の状況に合わせて決めてもよいのではないだろうか。

ここでどうしても忘れてはならないのは4.である。一部の日本の中国語教育者や学習者の中に中国語を完全な外国語としてではなく日本語と類似した言語、または日本語の祖先としての位置づけを認められる言語と考えようとする雰囲気が見られる。確かに日本の漢字や漢語、漢字音は中国から伝わったものであり、中国語の漢字の羅列を見ていると何となく何を言っているのかわかるような気がしてくる。これについては漢字の効用として別途論じる価値があるが、漢字一つ一つが意味を表し、そしてそのかなりの部分が中国語と日本語で共通していることを認めたとしても、両言語で世界の描き方が大きく異なるこ

とを無視できない。中国語でも日本語でも、それぞれの言語における時空表現、数量表現、動作過程の表現などが特有の文法構造及び語順と結合し、文やテキストが構成されている。日本語を母語とする学習者の弱点を論じる際とかく両言語の語順の差異や同じ漢字を使った単語でも意味が異なることが指摘されているが、語順や構文・単語の用法だけを文法だと考えていると、その根底にある時空や動作過程のとらえかた、数量の表現機能などを見逃すことになる。外国語学習にとって、語の用法や構文規則と同様、またそれ以上に把握が難しいのがその根底にあるその言語独特の世界表現の論理であるし、このことは、中国語が日本語とは異なる外国語であることを素直に認めることによって自覚されることになる。こうした前提のもとに、日本語を母語とする学習者が戸惑いを感じるような部分を理性的に理解できるような教材がぜひとも必要である。

また2.の問題は、文法規則重視か場面重視かという二者択一的に捕らえるべきではないだろう。ある語を使ってどのように単語を組み合わせある文法構造を作っていくのかという文法単位結合の規則とある場面でどんな言い方をするのかという言語使用の規則は、外国語学習の初級段階においては必ずしも相容れないものではなく、むしろ両者をつ一つつき合わせていく努力が必要だと考えられる。^{注6)}

筆者は、こうした前提に立ち、中国語を基礎から学ぶための教材開発に着手した。上記の1～4を意識した上で、さらに次の点を基本方針とした。

- a. 初学者が順を追って知識を積み重ねて学習できるような配列を重視する。
- b. 各課における新出学習事項が一定量を超えないようにする。
- c. 各課の学習事項を習得するための用例を十分に用意し、練習問題では単に構文のパターンを覚えるだけでなく、ある場面でその構文を使うという体験ができるようにする。
- d. 日本語を母語とする学習者にとって把握が困難である事項には特に豊富な用例や練習を用意する。
- e. 学習が進んだ段階では口語表現と文章表現の両者の差異を実感できるようにする。
- f. 週1コマ25回程度で学習できそうな分量で第一冊とし、残りを第二冊とする。第一冊の最後と第二冊の初めに復習教材を用意する。
- g. 中国の中国語教育界で基礎語彙としてリストされていない語彙の使用は極力避ける。

f. は実は苦肉の策である。現在の中国における外国人向け指導要領で「初級」とされている文法項目は、もし冷静に着実に学習しようとするれば一年で消化することは不可能である。しかし一方、「初級」の一部だけを学習する教材は、引き続き残りの部分を学習するのに適当な教材が存在しない場合きわめて無責任なものになってしまう。初級中級という名称にこだわるのではなく、必要な項目を学習するための教材の全体像をまず確立し、それを一年で学習できそうな量とそれ以外の部分に分けたということである。たとえば先に取り上げた「補語」については複数の課に分け、しかも基本的なものから派生的なもの順に第一冊と第二冊に分離して配置してある。さらに、第一冊の「本文」は会話中心、第二冊の「本文」では、会話の題材を提示した後にほぼそれに近い内容を伝える文章を用意し、口語表現と文章表現の差異に触れることができるように配慮した。この他練習問題には単純な翻訳ばかりでなく、絵を見ながら特定の場面を擬似体験しつつ聞いたり表現したりする問題を用意している。

4. おわりに

現在この新教材は編集途中であり、一部の授業でパソコンで印字したものを配布して使用しているに過ぎない。またこの教材が今後中国語教育界でどのような評価を受けるのかも全くの未知数である。現段階で編集中の教材の良否について軽々に論じることは差し控えたいが、中国語教育の抱える困難を少しでも克服したいという教材開発の試みは、今後も長期に渡って継続しなければならないと思っている。またここに提示したような問題点について学科の垣根を越えて多くの先生方のご指導を仰ぐことができれば幸甚である。

<注>

- 1) 各大学における中国語カリキュラムや教材選定の状況については日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会2002『日本の中国語教育・その現状と課題2002』参照。
- 2) 日中戦争当時から戦後にかけての中国語教育の変遷については、安藤彦太郎1971にその一端を垣間見ることができる。
- 3) 近年中国では外国人への中国語指導要領が複数出版されている。例えば北京語言文化大学出版社1999『対外漢語教学初級階段教学大綱1・2』『対外漢語教学中高級階段功能大綱』、北京大学出版社1995『中高級対外漢語教学等級大綱』など。
- 4) 中国大陸では1950年代にローマ字を使用したピンインという発音表記法を考案し、現在では商務印書館辞書研究中心2002『新華拼写詞典』商務印書館のような表記法の規範を示した辞典も出版されている。しかしここに示された基準では判断に迷うようなケースがあり、中国国内の学校教育でも漢字は学習するもののピンインによる発音表記の厳密な規範はあまり学習されていない。こうした原因もあり、日本の教科書の発音表記にはかなりの不統一が見られる。
- 5) これは対談における史氏の意見を記録した部分で、原文は以下の通り。
我使用了几种日本出版的教材，为了选用，也翻看了很多日本出版的教材，其中有很不错的，但是相当一部分是比较随便的，语法说明和练习不够甚至没有，针对性不强，不怎么切合应用，也谈不上科学。有些还是中国人编写或参与编写的，其中有的语言本身就成问题，病句很多，夹杂着方言土语，不地道，说是会话教材，有的却充斥着书面语行文，甚至还有逻辑和内容不当的问题。有的人本行是学经济、工业什么的，却也在编写出版中国语教材，真让人提心吊胆。
- 6) 筆者は言語学において構造主義と機能主義の相異なる流れがあることを否定するつもりは毛頭ない。両者の立場の相違を、あたかも相対立する流派の差異とみなして初級外国語教育の現場に持ち込むことへの疑問を提示しているに過ぎない。

参考文献

- 安藤彦太郎 1971『日本人の中国観』勁草書房
 輿水優 1998「中国語教育のインフラストラクチャー」『同学』15号1-2
 史有為 1997『伊地智善継先生談日本的漢語教学』「世界漢語教学」第4期 109-112
 日本中国語学会中国語ソフトアカデミズム検討委員会2002『日本の中国語教育・その現状と課題2002』
 劉方2002『日本新版漢語教科書中の注音失誤』「対外漢語教研論叢第二輯」華東師範大学出版社 196 - 205